

香港における日本語能力試験 26 年の歩み

佐々木 恭子

香港日本語教育研究会副会長

昨年の 2009 年、香港における日本語能力試験受験応募者数が 20,637 人と 2 万人の大台に乗った。初の夏冬年 2 回の受験になったとはいえ、単純計算で香港人の 350 人に 1 人が受験している勘定になるそうである。この数字は、能力試験が設立された 1984 年の受験応募者数が 1200 人(*世界での受験応募者総数は 7,000 人)であったことを鑑みると、26 年間で実に 17 倍という驚くべき増加を示している。

この進化と発展を続ける香港の日本語能力試験を 26 年にわたり支え続けてこられた余均灼名誉会長、石秋炯名誉会長(現理事)、李澤森名誉会長(現理事)、阮亦光副会長にお話を伺いながら、「香港の日本語能力試験 26 年の歩み」を振り返ってみたい。

1984～2009 年度 応募者数

年度	香港・マカオ地区応募者数					日本国内 応募者数	日本国外 応募者数
	一級	二級	三級	四級	合計		
1984	53	97	356	694	1,200	2,849	5,149
1985	54	223	672	726	1,675	4,422	10,344
1986	90	215	749	839	1,893	6,208	13,549
1987	103	208	699	756	1,766	6,781	17,345
1988	140	297	714	649	1,800	10,153	20,509
1989	167	480	743	723	2,113	16,551	24,853
1990	259	451	826	620	2,156	21,341	28,673
1991	358	639	1,067	769	2,833	28,790	38,706
1992	449	683	966	705	2,803	33,222	47,419
1993	539	702	901	685	2,827	36,560	58,753
1994	595	801	1,014	685	3,095	32,471	65,155
1995	714	857	1,089	718	3,378	29,771	75,930
1996	675	827	998	935	3,135	28,931	85,549
1997	542	806	921	648	2,917	30,095	92,865
1998	625	803	1,232	899	3,559	32,912	119,749
1999	615	873	1,374	1,156	4,018	38,168	157,869
2000	595	981	1,529	1,262	4,367	45,766	189,231
2001	733	1,051	1,800	1,545	5,129	54,891	215,961
2002	902	1,188	2,003	1,626	5,719	55,230	230,938
2003	1,055	1,528	2,547	1,918	7,048	60,949	260,038
2004	1,188	2,019	3,181	2,924	9,312	66,169	289,254
2005	1,257	2,102	3,622	4,570	11,551	68,799	351,024
2006	1,621	2,656	4,471	4,963	13,711	81,522	451,667
2007	1,860	3,296	4,880	5,510	15,546	103,259	529,221
2008	2,319	4,053	5,524	5,665	17,561	121,456	538,925
2009 (Jul)	1,498	2,315	N. A.	N. A.	3,813	55,711	234,102
2009 (Dec)	2,298	3,508	5,432	5,586	16,824	104,091	508,064

○1984年 第1回日本語能力試験実施への道

これより先の1978年に領事館内に設立された「香港日本語教育研究会」は、開設当初は委員会により運営され、委員長は香港大学、中文大学、理工学院(現理工大学)、在香港日本国総領事館広報文化部所属日本語講座(現文化協会所属日本語講座)の回り持ちとし、1982年には会則が生まれ委員制度がスタート、83年初代会長に日本語講座の黄泰俊先生が就任した。

1968年に開設された領事館文化部所属日本語講座に日本政府外務省所管国際交流基金(以下、「基金」)より専任講師が派遣されていたこともあって、1984年第1回日本語能力試験は領事館を中心として香港日本語教育研究会に委託され実施される運びとなった。このシステムは現在も変わらない。

○第1回日本語能力試験協力委員会設立

第1回日本語能力試験協力委員会の委員は、在香港日本国総領事館文化部飯田美代子文化部長、国際交流基金海外派遣江副隆愛講師、大学の日本語関係者2名(余均灼先生、原武道先生)、香港留日学友会趙達榮会長、香港日本語教育研究会代表石秋炯先生、会計監査として日本人倶楽部事務局長の7名で構成された。この協力委員会の構成は現在も変わっていない。

○第1回能力試験実施に向けて

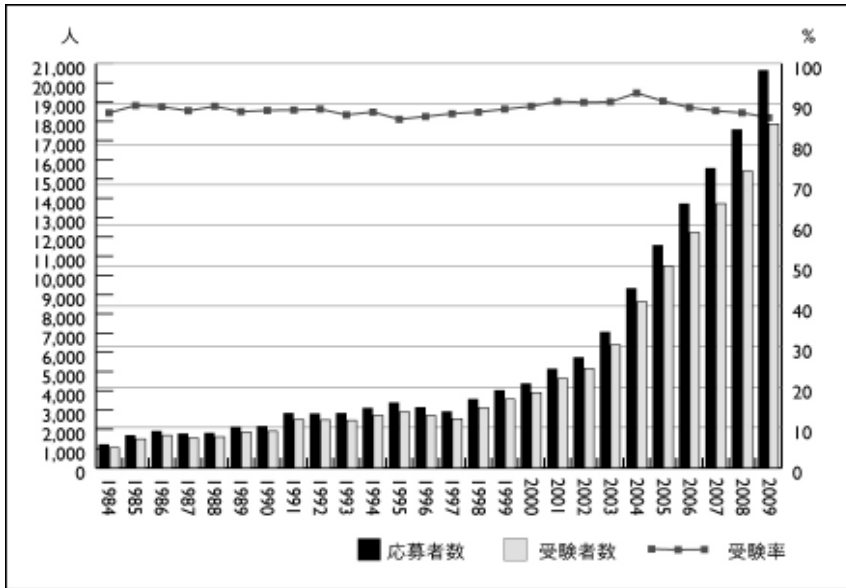
基金への問い合わせ、基金からの情報、基金との契約等はすべて領事館を通して行われ、第1回日本語能力試験に向け稼働を開始。まず本試験に先立ち、模擬試験が行われた。大学ではまだ日本語が正規の科目となっていない時代であったが、受験応募者は1200名(1級53名、2級97名、3級356名、4級694名)に上った。

試験会場は佐藤園江先生、原武道先生、李澤森先生のご協力で培僑中学、理工学院、萃華英文書院から提供を受け午前中に行われることとなった。試験実施の2週間前、何度も確認を重ねながら夜遅くまで「仕分け」作業が行われた。事務関係は石秋炯先生が担当、会計は李棟樑先生が担当であった。(第2回目からは李澤森先生が会計を担当され現在に至っている。)ちなみに1984年当時の受験料は1級が100ドル、2級80ドル、3級70ドル、4級60ドルであった。

○第1回日本語能力試験実施

本試験は各会場で午前中に行われ、午後2時にはすべてが終了。受験率は80~90%と非常に高かった。試験終了後は問題用紙、解答用紙、必要書類を領事館に持ち帰って整理、確認をして基金に送り返し、第1回日本語能力試験が無事に終わった。(※但し合格率は各国の比較となるおそれがあるため公開はされていない。)(図1参照)

図1 1984～2009年度 応募者数/受験者数/受験率の推移



○1990年 香港で日本語能力試験の過去問題集を出版

第1回の1984年から89年の第6回まで試験問題は一切公開されていなかったが、1990年香港日本語教育研究会は国際交流基金より許可を得て香港で過去問題集を出版、販売をすることとなった。これは能力試験受験希望者のみならず多くの日本語教育者、日本語学習者に対して大きな指針を与えることとなった。（*2006年度からは受験申込者に無料配布。2010年からは新試験制度によって年2回の実施となるため過去問題集は出版されない。）

ただ、香港で過去問題集を出版するに当たって一つの難題があった。それは、出題された「文章」の著者ひとりひとりに転載の許可を得ることである。領事館を通じて基金に問い合わせ、著者の同意書をもって初めて出版が可能となるため、手続きに手間取った。近年は簡略化され「凡人社」からまとめて同意をもらっているそうである。

○1996年 聴解試験にイヤホンの使用開始

能力試験でのイヤホンの使用は香港独特のものである。1996年よりHITEC(九龍灣國際展貿中心)で行われる聴解試験にイヤホンの使用が始まった。96、97年は1級受験者のみ、1998年から2001年には2級受験者にも、2002年からは各級にイヤホンの使用が統一された。使用開始から現在に至るまでイヤホン使用による問題はほとんどない。

○1999年 マカオ大学が試験会場に

当時香港日本語教育研究会の会員であったマカオ在住の日本語学習者に対して、1990年よりマカオ大学での応募受付も始まっていたが、試験は香港で受けなければならなかった。しかし、受験応募者数の増加、交通費の問題もあり、マカオ大学の協力を得て試験会場にマカオ大学も加わった。

○2002年

受験者数の増加に伴ってこれまで午前中に行われていた試験が午後にも行われるようになった。

○2005年 受験申し込みに「オンラインシステム」を導入

これまで日本語講座内にあった研究会事務局が湾仔に設置された研究会事務局に移管されるとともに、研究会が独自に開発したオンラインシステムを導入。受験料も送付可能となり受験者にとっても非常に便利なシステムとなった。願書も香港で作成し、受け付けた願書を日本に郵送するというこれまでのシステムは、データのみをメールで送るというシステムに簡略化された。この年、日本語能力試験が香港政府の CEF (持續進修基金) の認定試験として認可されたため受験応募者数も激増した。

○2006年 仕分け・残務処理など研究会事務所で

2005年まで領事館で行われていた「仕分け」、「残務処理」など諸々の業務を、この年より研究会の事務所で行うようになり、試験問題用紙、解答用紙を収納する紙袋も香港で印刷するようになった。(※基金から試験用紙等の荷物を直接受け取るようになったのは2008年からである。)

○2008年 成績結果の確認

成績結果がインターネットで確認できるようになった。尚、2009年オンラインによる申し込みの受験料はPPS支払いが可能となった。

○2009年 能力試験が年2回に

1年に1回12月の第1日曜日に実施されてきた能力試験が、7月の第1日曜日にも1級と2級の試験が行われ、年2回へのスタートを切った。

○2010年 生まれ変わる能力試験

2010年、日本語能力試験は大きく生まれ変わろうとしている。レベルは5段階となり出題形式も内容も衣替え。年に1度であった本試験が7月と12月の2回に定着する。日本史的な表現をあえて使わせていただけるならば、「夏の陣」「冬の陣」である。また、2012年より新高中文憑試に日本語が参入する。日本語学習者の裾野が広がっていけば、日本語能力試験の受験者もさらに増え続けていくことが期待される。

能力試験 26年の歩み 番外編

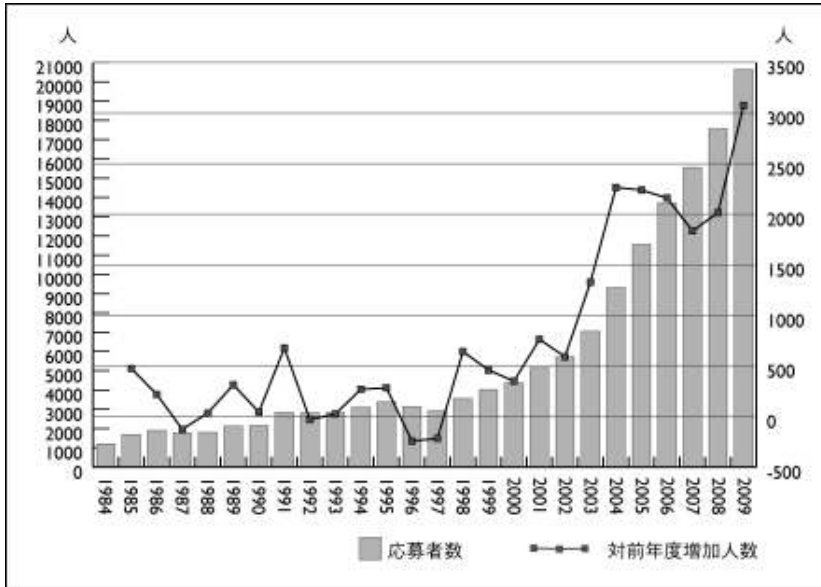
年々増え続ける受験応募者数が96年と97年に減少しているのは、香港の中国への返還で移民問題などの影響が考えられる。(図2参照)

中国本土では1・2級の受験者が多いのに対して、香港の受験者は4・3級が多いのが特徴である。また、1級合格者の中には、毎年1級を受ける者もいる。得点のアップ、実力の維持、ゲーム感覚と目的はいろいろのようだ。

受験者の年代層は、2008年度を例に取ると4級受験者は9歳から77歳、3級受験者は10歳から74歳、2級受験者は10歳から63歳、1級受験者は13歳から64歳と、級が上がるにつれ年齢の幅が狭まっている。(図3参照)

過去最年少は7歳の女子小学生で4級を受けた。一般的には20歳前後から30代前半が多い。性別は女性が約70%と圧倒的に多く、これは日本語学習者数に比例しているといえる。

図2 1984～2009年度 応募者数/対前年度増加人数



受験応募者の増加につれ、能力試験準備委員会が頭を痛めるのは、会場の確保と受験生の振り分け。各級の受験者数に応じて会場の手配が必要となる。香港における試験会場は、多数の受験者を収容できるHITECを主として、官立中学校を使用させてもらっている。試験監督員は原則として会員を優先、他に会場の関係者、経験者に依頼し、監督補助員は大学や中学校の協力を得て大学生、試験会場のF6の生徒などに依頼。会場使用料は2009年現在、HITECが受験者1人につき40ドル、中学校が同じく受験生1人につき20ドルとのことである。

さて、試験会場としてはかなりユニークな場所があったそうだ。それは刑務所。90年代に1年おきに2回行われた。受験者は10年以上の刑に服し社会復帰のために日本語を学ぶ男子受刑者10数名。4級の試験で監督員を務めた阮亦光理事によると、「欠席者は絶対いないと思っていたのに1人いた。理由は試験日前夜に仲間とケンカをして独房に入れられた。」とか。また、試験の休憩時間に『オレは人生で初めて試験を受けたんだ。とても緊張している』と興奮して話してくれた40代の受験者もいたとのこと。

失格者もたまに出る。不正行為はもちろん、近年ではケイタイなどのベルが鳴ると失格になる。これまで数人いたそうだ。中には替え玉受験が1件。男性が女性の身替わりをしていたそうである。

終わりに

香港における日本語教育の進歩と発展のきっかけで、26年という長きにわたり「日本語能力試験」を支えてこられたのは、余均灼先生、石秋炯理事、李澤森理事、阮亦光理事のたゆまぬ努力であり熱い情熱であり、日本語教育研究

会会員各位、そして研究会を支援してくださる日本語教育機関の関係者各位の協力の賜物である。香港の日本語学習者を励まし、そして、励みを与える日本語能力試験の今後のさらなる発展を祈りたい。

図3 2008年度日本語能力試験 応募者年齢分布図挿入

